

誰もが生きやすい社会を目指して

福井市 足羽中学校 三年 松浦 小夏

私には障がいを持った伯父さんがいます。その伯父さんは祖父が亡くなってから、祖母と二人暮らしをしています。私の家から近いところに住んでいるので、休みの日などにはよく妹たちと遊びに行きます。伯父さんは仕事もしているし、小さいいこと遊んだり、畑仕事をしたりもします。私は小さい時からたくさん可愛がってくれる優しい伯父さんが大好きで、伯父さんが障がいを持っているということをもったく気にしていなかったし、むしろ伯父さんを特別な目で見たことはなく、自慢に思っていました。しかし私が小学校高学年になり、とても悲しい出来事が起こりました。小学校の友達と集団登校をしているとき、犬の散歩をしていた伯父さんを見つけました。私は手を振ろうとしましたが、友達のある言葉が耳に入って、手を振ることをやめてしまいました。友達が伯父さんの方を見て、「あの人、なんか変だよね。」と言ったからでした。私はその瞬間とても悲しくなりましたが、胸が痛みました。このころから、伯父さんは普通の人ではないのだと思ってしまうようになり、少し距離を置いてしまうこともありました。今思うと、本当にひどいことをしてしまっていたと思います。

す。伯父さんに対して、少しでも差別的な目を向けてしまっていた自分が恥ずかしいです。しかし、中学生になってから、LGBTQや、人種差別など人権について考えることが増え、伯父さんに対する考え方が変わっていきました。伯父さんは、私たちと同じ人間で、特別な目で見たり、かわいそうと思ったりする必要はないのだと考えるようになり、今では自分でできることをして、楽しいと思えることを見つけて、にこにこ幸せそうに生きている伯父さんを尊敬しています。今でも自慢の人です。

中学生になってから人権問題について考える機会が増えました。その中で、私の伯父さんのように障がいを持っているからという理由で差別されてしまったり、見た目の違いでひどいいじめを受けたりしている人がたくさんいることを知りました。差別やいじめを受けてしまっている人たちは、きっと私が感じた悲しみ以上のものを感じていると思います。その辛さに耐えられず、自殺という道を選んでしまう人もいるほどです。

どこかの記事で、障がいを持っている人が、「特別な目で見られるのが辛い。」「自分のできることを奪われるのが辛い。」と言っているのを見つけたことがあります。その記事を見て、自分が親切だと思っただけなのに、相手を傷つける行為になってしまうことがある、ということに驚き、深く考えさせられました。思い返してみると、実際に伯父さんと接するとき、伯父さんに

はできないだろうと勝手に決めつけて、必要のない手伝いをしていたかもしれない。そのとき伯父さんはどんな気持ちだったのでしょうか。私ができることまでを他人に奪われてしまったら、自分のことを信じてもらえていない、一人では何もできないだろうと思われているような気がして、悲しくなってしまうと思います。相手を傷つけてしまうような行動は思いやりとは言えません。相手が頑張ってやろうとしていることをすぐに手助けするのでは相手のためにもならないと思います。優しさだけの思いやりを持つのではなく、相手のことを考えることのできる思いやりの心を持てるようになりたいです。

今、障がいを持っている人のために、いろいろなところでユニバーサルデザインが取り入れられるなどの取り組みが行われていますが、ただ環境が整えられるだけでは意味がないと思っています。一番必要なのは、みんなが、この社会にはいろんな人がいて、人間は一人ひとり違っているのが当たり前なのだという考えを常に持つことです。伯父さんは周りに、支えてくれて理解してくれる人がたくさんいたから、幸せに生きることが出来ているのだと思います。しかし、周りに理解してくれる人がいなければ、障がいを持っている人は生きづらくなってしまうだろうし、社会は何も変わりません。理解してくれる人が増えれば、自信を持てる人も増え、いろんな人が生きやすくなると思います。このよう

にどんな人にとっても生きていて幸せだと思いうことが出来る社会になってほしいです。

私が入権について考えるうえで、伯父さんがいなければ、ここまで深く考えることはできませんでした。伯父さんには感謝しています。これからも伯父さんを大切にしていきたいし、どんなことがあってもずっと理解者の一人でありたいです。そして、少しでも理解してくれる人が増え、伯父さんを含め、障がいを持った人たちに幸せに生きてほしいと思います。